

ねじりはちまき

8月 立秋 処暑の月になりました。

8月7日立秋です。11日山の日、15日月遅れ盆、22日処暑、31日二百十日となっております。

8月はまだまだ猛暑が続く頃ですが、旧暦では仲秋頃にあたるため、季節としては秋になります。旧暦8月は葉月と呼びますが、葉が繁ることではなく葉が散り始める頃を迎えるという事からきています。また、稲穂が張る月であるころから張り月が転じて葉月になったという説もあります。そのほかベニゾメヅキ、月見月、秋風月と言った異名があります。厳しい夏もあとわずかと思えます。残り少ない夏をどうぞ有意義にお過ごし下さい。

幸田 常一

\*\*\*\*\*

<会社近況>

ただいま、郡山市、本宮市などの現場でお世話になっております。

暑さが厳しいため、熱中症対策をしっかりと実施しながら作業を進めているところですが、しばらく猛暑が続くようなので、疲れや夏バテにも気をつけたいですね。

<商品紹介>テラスやバルコニー、縁側は住宅の様々な場所で軒空間を実現し暮らしを豊かにします。 (画像) LIXIL カタログより引用



**リビング前に広がる  
軒空間を創造**

テラス空間に屋根があれば、  
広がりを感じさせる自分らしい空間に。  
くつろぎに満ちた時間が  
庭とともにゆっくりと流れていきます。

2.5間 9尺 柱:ブラック 屋根材:ナチュラルシルバー デッキ:デッキDS グレーステインウッド

**注** 特に小さなお子さまが近くにいる場合は、手すりの近くには、植木台や椅子、テーブル、箱などのように足掛かりとなるような物を置いたままにしないでください。また、エアコン室外機は足掛かりとならない位置に設置するか、上から吊るすなど、設置場所にご注意ください。お子さまが上に乗って転落するなど、人身事故につながるおそれがあります。

\*\*\*\*\*

<夏季休業のお知らせ>

誠に勝手ながら、下記の期間を夏季休業とさせていただきます。

8月11日(日)~15日(木)

8月16日(金)より通常営業となります。夏季休業中はご不便をおかけいたしますが、何卒ご容赦下さいますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

令和6年8月5日発行

<発行責任者>幸田 久美

有限会社 幸田建設

969-1204 本宮市糠沢字八幡 1-1

電話 0243-44-3816

<後記> 先日、猪苗代湖にいきました。

外気温が40度近くありまして、湖水の

温度があたたかくて、驚きました。毎年

少しずつ温暖化していく恐ろしさを痛感

しました。

(ほしの)

消滅する危機にある市町村？

今回は人口に関する報道中心に綴ってみた。ちょっと暗い内容が多いかも知れない。お許し願いたい。

4月25日の民友新聞に「県内33市町村（全国：744）が消滅可能性」というショッキングな記事が掲載された。これは「人口戦略会議」というところから発表されたとのこと（浜通りの13市町村は原発事故の関係から除外されている）。「消滅可能性」は将来の人口推計から判定されている。特に、2020～50年の30年の間で出産の中心となる20～30代の女性が5割以上減ると推計される市町村が「消滅可能性市町村」とされるというわけである。幸い今回の推計では本宮市と大玉村は含まれていない。（注）但しどういう状態を指して「消滅」とするのかは明らかでない。

実はこの「消滅可能性市町村」について公表されるは、今回が初めてではない。10年前（2014年）ごろから取り沙汰されている。その頃名指しされた「消滅可能性市町村」の数は全国で896、その内2040年の推計人口が1万人以下の市町村が523であった。ではなぜこのように個別市町村名まで公表するのであろうか。当時公表された時掲げられた標題には、「成長を続ける21世紀のために、ストップ少子化・地方元気戦略」或は「未来への選択—人口急減・超高齢化社会を超えて」などというものであった。その狙いというか、問題意識というのは、どうも人口急減・少子化に早急に、的確に対処しなければ大変なことになるという警告にあるようだ。しかし、個別市町村の対応だけでは実効をあげるのは難しいだろうし、国策に依存するところが大きい課題（政策テーマ）である。現にこの頃から、国では「地方創生」の一環として、少子化対策（出生率の向上）のため、結婚・出産・子育てを切れ目なく支援する政策に本腰を入れ始めている。もちろん、国と連動して市町村も課題と向き合い、真摯に対応する動きにある。ところがそれら政策の実効性はどうかだろうか。どうも、実効ありとはいえない状況のようである。少子化は依然として下げ止まっていはいない。

この「消滅可能性市町村」のテーマに関して、6月17日のNHKテレビで「若い女性の流出」についてその要因を掘り下げた番組が放映された。つまり、「結婚・出産・子育て」の支援（充実）だけでは若い女性は地方に定着はしない、大都市圏への流出は止まらない（男性より多い）—もっと若い女性の本音を聞き出して対応策を講ずる必要がある、ということも訴えていた。つまり、現在採られている対応策（政策）と若い女性の願い（生き方の選択）にギャップがあるということだ。では、そのギャップとは何か。首都圏に流出している若い女性から聞き取りした結果によると、次の3点が挙げられるという。

- ①働き甲斐のある仕事に就きたい（地方では正規雇用の機会が少ない）
- ②結婚に干渉しないで欲しい（早く結婚して子供を生んだ方がいいと勧められる）
- ③地域の役割を女性に押し付けなくて欲しい（地域の行事や家庭での男性優位の伝統的価値観）

この若い女性の本音を聴いて成程と思ったが、これらの課題に対し、どのように手を付けていったらいいものか。テレビではいくつかの取り組み事例が紹介されていた。一挙の解決とはいかない揃物だが、いずれにしても、課題を放置しないで、やるべきことはやらないと現状は打破できないだろう。

また次も人口流出の話だが、県が首都圏の本県出身者に対して初の実態調査をした結果が報じられた（6月21日付）。18～34歳の若者が対象である（512人が回答）。この調査では男女の内訳は分からない。では、調査結果はどうであったか。結果は次の通りである。

- ①本県を離れるタイミングは、大学進学である（64.5%）
- ②本県に愛着がある（70%）が、将来本県に戻る可能性がある（ややあるも含め）は25.2%に止まっている。本県に戻る可能性がある切っ掛けとしては、親の介護や病気・首都圏での暮らしに疲れた時などで消極的な理由が多かった。
- ③県内移住や定住について地域や企業に求める取り組みとしては、「給料の良い就職先を増やす」「働きたいと思える企業を増やす」と雇用の受け皿整備を求める声が多く、「女性・若者が楽しめる場所を増やす」を大きく上回った。

県内就職や転職を検討したことがあるとの回答が43.4%あったのだが、希望する就職先が見つからず、県内移住を断念したことが窺える。

この調査結果を見て思ったことは、「給料が良くて、働きたいと思える企業」と言ってもどういう企業であればいいのだろうか。人によって希望する内容は異なるだろうし、絞り切れないし、詰まるところ選択肢を多くしてくれということですかね。でも、小生としては「地元に戻って、地元で暮らそう、地元にお役に立とう、そのための選択をしよう」という気持ちになるのが先かなと思ってしまうが。

次も余りいい話題ではないが、2023年の出生率について報道（6月6日）があったので紹介しておきたい。厚生労働省の発表によると、女性一人が生涯に産む子どもの推定人数「合計特殊出生率」は1.20となり、過去最低を更新した。未婚・晩婚化が影響した。出生数は過去最低の72万7277人で、政府想定より11年早いペースで減少している。本当にどうにかならないものか。

では、福島県はどうか。本県の合計特殊出生率は1.21で全国平均をわずかに上回ったものの、7年連続で減少している。出生数も9019人と9千人割れが目前となっている。

今回のテーマは、「消滅可能市町村」の話からスタートしたが、県全体としての「人口対策」の話のようになってきてしまった。「人口減少」というものは、一つには「人口流出」があり、もう一つには「出生率・出生数の減少」がある。本県も全体としては、28年間連続して人口流出県である。首都圏への流出傾向が続く中で、特に原発事故の影響が大きかった。首都圏へは若者の流出が多い。若者のうち女性の流出が多いという状況が見られる。福島県の人口はピーク時（1997年）には213万人であったが、現在は176万人になっており、このままいけば将来的には125万人になるとの推計もある。国・県・市町村の政策も大事だが、国民の意識が変わらなければどうにもならない事柄でもある。

では明るい話題をひとつ。6月22日の報道によれば、2023年度県内移住が過去最多の3419人（2419世帯）になったとのこと。年代別では7割が10～40代で、若い世代の移住が多い傾向が見られた。移住前の住所は、東京・神奈川・千葉・埼玉の1都3県が約半数を占めており、隣県の宮城県からの約1割あった。世帯別では単身が約76%であった。地域別では、東日本大震災と東京電力第一原発事故からの復興が進む相双が806人と最も多く、県中の690人、県北の566人、会津の510人となっている。一極集中が進む首都圏からの移住は望ましいと思う。相双は数が多いが、単身者が多いとも聞く。家族で来ていただければ有難い。問題は子どもの教育にあるようだ。

最後に、消滅しないよう頑張っている町の例を。5月27日(土)のNHKテレビ「新プロジェクト1x～挑戦者たち」で「隠岐の島に希望を取り戻せ・破綻寸前からの総力戦」という番組の放映があった。町の人口が急激に減っていく、今から20年前島根県の離島・海士町は深刻な過疎に直面した。返済の目途が立たない102億円の借金も抱え、町の財政は破綻寸前。その時「島の未来を守ろう」と立ち上がったのは、元営業マンの町長、自ら給与をカットし、改革に乗り出した。その思いに役場職員と住民が続いた。地元高校を蘇らせ（国内留学生の募集）、新たな産業（海産物の加工とセールス）を生み出し、活気を取り戻した。島の存続をかけた総力戦が展開された。春はイワガキ、夏は観光業、秋はイカ、冬はナマコで、海産物の輸送に時間がかかるので、離島でも鮮度を保ったまま本土に出荷できるシステムを導入した。15年で750人が移住し、その内350人が現在も定住しているという。

最後に一言。小生としては、首都圏の人々にもっと「田舎暮らし」を進めたい。給料は少々安かろうと、恵まれた自然環境の下に、四季の変化と家庭菜園を楽しみながら、競争に追われることなく人間らしく、伸び伸びと「田舎暮らし」をしてみませんか？

## 北アルプス裏銀座～読売新道縦走 山小屋3泊

(百：日本百名山、◎：日本二百名山、○：日本三百名山、カッコ内の数字は  
標高)

### 【今回登った山】

- 7月24日 烏帽子岳 (◎えぼしだけ 2628m)  
25日 野口五郎岳 (○のぐちごろうだけ 2924m)  
26日 水晶岳 (百すいしょうだけ、別名黒岳 2986m、再登)  
赤牛岳 (◎あかうしだけ 2864m)

今回計画したコースは裏銀座コース(※1)の前半と読売新道(※2)を結ぶ、高瀬ダム(ブナ立尾根)を起点とし、烏帽子岳から野口五郎岳、水晶岳へと縦走し、赤牛岳を経て黒部ダムへと下るロングランコースで、合計距離 40.87 km、最高点の標高 2986m(水晶岳)、最低点の標高 1265m(ブナ立尾根取り付き点)、累積標高(上り) 5737m、累積標高(下り) 5583m。

(※1) 北アルプスの七倉ダム/高瀬ダムを登山口とし、野口五郎岳、鷲羽岳、双六岳などを経て槍ヶ岳へ至る登山道の名称。

(※2) 奥黒部ヒュッテから赤牛岳山頂までの区間を指す登山道。広義の意味では、黒部ダムから水晶岳までを読売新道と呼ぶこともある。読売新聞社が開設したルート。

### 7月23日(火)

外せない用務があったので自宅発は16時になった。北陸道糸魚川IC経由で長野県大町市平高瀬入の七倉山荘を目指した。車のナビで「高瀬中心部」として進み、22時前別荘地のようなところに着いたが、途方に暮れてしまった。たまたまいた若者3人に携帯のナビ機能の操作をしてもらった。登山口の七倉山荘はそこから16キロほど山に入った所だった。24時頃就寝する。

### 7月24日(水)

夜中、車の屋根を打つ音で目を覚ます。雷雨だ。登山口の高瀬ダムは山荘から4.5kmほどあり、関西電力の管理用道路で一般車の通行は規制されている。山荘に宿泊した人など20人以上が結構強い雨の中をタクシーに乗り込んでいく。天気の様子見をしているのは自分を入れて3人で、一人の中年男性は撤退するという。小降りになってきたので、自分と40歳代のAさんが乗り合わせていくことになった。7時過ぎ。

3月に土砂の崩落があり、タクシーはその部分の運行はしないとのことで一回乗り換える。4.5kmのうち中間の1.4kmは歩くことになる。ダムの堰堤で降車する。弱い雨が降っている。山行を中止にしたいような空(山)模様だった(写真次頁上左)。

山には30人位は入っていると思いなおし、Aさんは2回来ているとのこと

でついて行く。トンネルを通り、吊り橋を渡る（写真上右）。



吊橋を渡ったところにも小さな沢がある。丸太の橋の下は濁流が流れている。（写真中）



正面には泥水の滝が轟音を立てて流れ落ちている（写真下左 Aさんと前方の滝）。

登山口（写真下右）で下山してくる登山者と話す。大雨では丸太の橋が流されることがあり、休まず



ここでAさんと分かれる。マイペースでゆっくり行かつもりだ。若者にはついて行けない。

8:25 登山口発。すぐに鉄製階段の急登が始まる（写真次頁上左）。

このブナ立尾根は日本三大急登や北アルプス三大急登などと呼ばれているが登った後の感想としては、この程度の急登はほかにもあると思った。ただロングコースだ。標高差約 1250m、100m 毎に目印の看板が設置されている。樹林の中で展望もなく雨が滴り落ちるので、ひたすら歩くのみ。整備されているので難所もなかった。



に下山してきたとのこと。



上部では右手に山体の崩落地が見えてくる（写真上右）。



樹木の切れたところから大きな山塊が見えてきた。翌日野口五郎岳の手前で通過することになる三ツ岳（2845m）か（写真左）。

稜線に出る手前にゴゼンタチバナがたくさん咲いていた（写真下左）。



13：40 烏帽子小屋着。登山口から5時間15分。青っぱいコマクサが出迎えてくれた（写真下右）。



小屋前のお花畑（写真上）。



雨は止んできたが風強く往復 1 時間半の烏帽子岳登頂は断念する。残念だが烏帽子岳は岩場なので、受付の人も今は無理とのこと。1 泊 2 食 13,000 円。

指定の場所に落ち着く。キャンセルがあったのか 6 人部屋に 3 人。7 月 7 日予約開始以来、予約を取るのに 50 回以上電話し、キャンセル待ちでようやく確保できたことを思えば肩透かしを食った感じだ。（水晶小屋と奥黒部ヒュッテはかなり以前に予約できていた。）

自炊スペースでは既に 7~8 人が飲み始めて山談義で盛り上がっていた。濡れたものを乾燥室でハンガーに架ける。

2 時半過ぎ頃から、晴れ間も出てきて風も弱くなった感じだ。中年のペアが烏帽子岳に向かったのも、急いで自分も準備した。明日の朝が現在よりも天気



が良いとは限らない。今回、二百名山を一つ残すわけにはいかない。15 時過ぎ小屋を出発する。

樹林帯を抜けると前烏帽子（ニセ烏帽子）が見えてきた。この山を越えると烏帽子岳山頂が秀麗な姿を現した（写真下）。



時折突風が吹いてくる。先行した中年のペアとすれ違い声を掛け合う。

右横の方から反時計まわりに回り



込んで登って行く。

クサリを使いながらよじ登り（写真上左）、足場の狭い所を歩いたりして（写真上右）、16：20 山頂に至る（写真中右）。289 番目登頂。



記念に自撮りする（写真下左）。時折雨風が強くなり、帽



子が飛ばされそうになる。山頂は10分ほどで下山する。前烏帽子岳から見た三ツ岳（写真下右）、翌日野口五郎岳に登る前に経由する山だ。



17：30 烏帽子小屋着。17 時からの夕食に間に合わなかった、心配をかけた。ガイドブックには片道 45 分となっているが、往復 2 時間 20 分かかった。



夕焼け（写真上）。

明日の準備をし、布団に潜り込む。寒い。20時消灯。

7月25日（水）

4時前ごろからざわめき始め、5時前に起床。朝食は前夜

夕食の際におにぎりを渡されている。各自出発していく。自分は食堂のお茶をいただきながら持参のパンを消化する。おにぎりは昼食用にする。前日に烏帽子岳に登ったし、きょうは水晶小屋まで行けばよい、余裕だ。

6:20、ほとんどの登山者が出払った後に出発する。スタッフの人に写真を撮って貰う（写真下）。キャンセル待ちで何回も電話の対応をしてくれた女性



だった。キャンプ場を過ぎたところで、野口五郎岳を早朝出発し、下山中の男性一人に女性5~6人のグループと挨拶を交わす。昨日水晶小屋から烏帽子小屋に向かったが、尾根上のルートは雨風が強く、途中の野口五郎小屋でストップしたとのこと。

昨夜烏帽子小屋がすいていたのはこのことも関係したのだろう。皆それぞれ単独行だったが雨風のおかげで一緒に行動することになったとのこと。

言葉が東北なまりの女性がいたので聞いてみたら、仙台の人だった、いわきの女性もいた。水晶小屋に福島出身の人が働いていることなど矢継ぎ早に話してくれる。鹿児島女性は前日の水晶岳でグループは違うがすぐ隣にいた人が滑落して亡くなったのでショックだと話していた。体の具合が悪かったらしい。

三ツ岳（2845m）分岐手前の稜線では体の右側から風と雨、左側から天日差しが差しこむおかしな天気だった。ザックカバーがバタバタと音を立てる。風を避けるため分岐から稜線上の道でなくお花畑を通る巻き道に進む。ピンクのコマクサが印象的だった（写真次頁上左）。写真右は小さな花で、何の花だろう。



岩に野口五郎小屋までの距離が 500m から 100m 毎に書かれている (写真中左)。ガスの中の野口五郎小屋 (写真中右)



10:20 着。土間でミルクココアを頂く。20 分ほど休み、ガスの中を出発する。稜線に出ると風が強い。

11:05、野口五郎岳山頂着 (写真左)。290 番目登頂。



野口五郎岳から真砂岳 (2862m) 方面を見る (写真下左)。

真砂分岐の少し上から水晶岳 (黒岳) 方面を望む (写真下右)。色調が茶系から、黒系に変わるのが見て取れる。



真砂分岐（写真上左）、12 時少し前通過。ここから右方向に竹村新道、急坂の下り、湯俣温泉に至る分岐だ。数日前山友Nさんが通ったところだ。



アップダウンする道の特に左側（南側）にはお花畑があちこちにあった。

天気がもう少し良かったら何時間でも居たい所だ（写真中2枚）。



真砂岳や野口五郎岳を振り返る（写真下）。



自分は水晶小屋の近くまで来ていると思込み、岩場で昼食休憩し、天候の回復を待って長居していたら、2~3のグループが通り言葉を交わす。水晶小屋までは

自分の考えよりもまだ時間を要するようだ。そのうちにまた雨風が出てきて強くなり、近くで雷が鳴りだす。バリー（ビリー）バシャバシャみたいな平地で聞く雷鳴とは異なり容赦ない響きと振動だ。急いで準備し先を急ぐ。確かにいくつかのガレたピークをアップダウンする（写真次頁上左）。時間はかかる。地肌も赤色のザレ（ガレ）た山になったり滑る。

写真上右は、進行方向左手（南側）、赤岳（2416m）や硫黄岳（2554m）方面か？



以降は雷、雨、風が強く写真を撮れる状態ではなかった。ほうほうのていで最後の急登を登り終え、目指す水晶小屋にたどり着く。14:45着。

早着の人達はくつろいでいた。濡れた衣類を乾燥室にハンガーで吊るすが重なり、これで乾くのかなと思ってしまう。

指定された寝場所は二階の奥で屋根が低く、注意していないと太い梁に頭をぶつけてしまう。（水晶小屋は標高2900mに建つ。過去2回暴風で全壊。現在の建物は2007年に新築）

自分の後にも9人の団体さんが濡れ鼠で到着した。さらに単独の71歳の女性は他の登山者や、山小屋同士の連絡で知れ渡っていて、皆で心配していたが、暗くなる前に小屋に着き、皆で胸をなでおろした。日本三百名山を270山以上登っているとのこと。

小屋で働く福島出身の人はとてもフレンドリーな若い女性Hさんで、数日前にも福島の人に来てくれたことなどを話してくれたが夕食の準備で忙しくゆっくり話している時間はなかった。持参した薄皮饅頭を2個あげたら「ウレシイ」と言って喜んでくれた。

17時からの夕食はカレーでお代わり自由だった。

20時消灯だが、皆その前に就寝し、静かになった。翌日の天候の回復を念じて床に就く。

7月26日（金）

4時起床、5時食事、5:45出発。

出発前にHさんにあいさつしたら、薄皮饅頭は皆でごちそうになりましたと笑顔で話してくれた。近くにいた女性もおいしかったですとのこと。2つを何等分して食べたのだろう。かえって恐縮した。

予報では天気は良くなるとのことだが、外はガスがかかって見通しはきかない写真上左)。3日連続で雨具を着けてスタート。

6:40 水晶岳(南峰 2986m) 山頂着(写真上中)。部屋で隣りだった人が早く着いていた。自分は水晶岳は2度目で、昔百名山を目標にしていた頃に登った時には三俣山荘から黒部源流碑を經由し、鷲羽岳(百 2924m)を右に巻いて水晶小屋に至ったが、山頂登頂時のことはよく覚えていない。今回の烏帽子小屋から一日以上かけて登った水晶岳登頂は格別の思いである。

黒部五郎岳(百 2840m)や薬師岳(百 2926m)が見えているが上部はガス(雲)に覆われている。待っていれば晴れてきそうな気がするが、しかし長居はできない、今日は赤牛岳山頂を踏み、奥黒部ヒュッテまで下る必要がある。



10分程いて北峰に向かう。  
7:00 水晶岳北峰(2978m)着。南峰を振り返る(写真上右)。



今回目標とする赤牛岳方面(写真下ズーム)。中央の山並み。奥の赤茶けた山頂までには、花崗岩の岩場の上下り、砂礫地を登下降し、いくつものピークを越えたり、巻いた

りして近づいていく。左手にずっと見えている膨大な山塊の薬師岳上部の雲はなかなか取れない(写真次頁上)。3日目にしてようやく北アルプスの絶景に逢うことができた。雨具を脱ぐ。



稜線上西側の花畑（写真下）。



写真次頁上、  
前日は対岸の野口五郎岳  
からは東沢谷を挟んだ赤

牛岳などの山並みは雲がかかって見えなかったが、写真左側から右側へ烏帽子岳、三ツ岳、野口五郎岳、真砂岳へと赤茶けた山並みが連なっている。右端の

黒っぽい山肌から水晶岳（黒岳）の領域になってくるのか。素晴らしい景観だ。



水晶岳方面を振り返ると、水晶岳を挟んで槍ヶ岳（百 3180m）が左に、笠ヶ岳（百 2898m）が右に見える。分かりますか（写真左）？

写真下左は温泉沢ノ頭。ここから見た赤牛岳（写真下右）。右奥に黒部湖

がかすかに見える。





赤牛岳山頂 (2864m) 11:30 着。水晶小屋から 5 時間 45 分。291 番目登頂、残り 9 山。



薬師岳を眺めなが



ら昼食。先客はテント泊の若い男性と小屋泊りの二人の若い女性。いろいろ話したら一人の女性の母親は自分より 3 歳若かった。証拠写真を自撮り (写真上右)。



12:05 赤牛岳出発。まずはザレた急斜面を慎重にトラバースする (写真左)。ここから激下りだ。

(奥黒部ヒュッテ 1500m、黒部ダム 1448m)。

読売新道はヒュッテから赤牛岳まで 8 等分されていて赤牛岳からは 8/8 から 1/8 まで看板が出ている。

黒部湖の右に未踏の針ノ木岳 (◎2821m) などが見えている (写真中右)。



ガレ場も慎重に通過する (写真左)。



東沢谷越しに前日に登った烏帽子岳（中央の突起）が見える（写真左）。

岩場を離れ、まずは木道（写真中）。

13：50 樹林帯に入る。以降、木の根の露出したところや崖地などアスレチック要素たっぷり



の道を延々と下る。

時々休みながら、奥黒部ヒュッテ（写真下）17：25着。5時間20分の下りだった。水晶小屋から11時間40分。

水晶小屋を自分とほぼ同じ6時前に出発した9人の熟年パーティは暗くなった19時過ぎにヒュッテに着いた。

新潟の熟年登山クラブとのこと。ケガもなく良かった。賑やかだった。

ヒュッテにはお風呂があり助かった。車中泊含めて4日分の汗を流す。

若い女性2人は自分より赤牛岳を30分くらい早く出発していたので、すでに食事を終えていた。

夕食は自分の目標の4山（水晶含む）に登ることができたので大いに満足し少々飲みすぎた。10畳くらい広い部屋に自分ともう一人の2人で、その人は50歳代で翌日読売新道を登る人だった。就寝、20時消灯。



7月27日（土）

3時くらいから同室の人がガサゴソ音を立てて、まだ暗い4時には出発した。朝食は6時だったが、団体さんは既に食事していた。10人くらい入る食堂だったので交代だ。水は、

他の二つの小屋ではミネラルウォーターやスポーツ飲料が500ml、700円だったが、ここのヒュッテの水は飲めるとのことだったので蛇口をひねりボトルに入れていく。

団体さんの後、6：30 出発。黒部川右岸から左岸に渡るのに渡し船に乗る必

要がある。針ノ木谷渡場 10:20 発の船に乗らないと次は 2 時間後だ。渡し場まで所要時間は 2 時間とのことだが初めてなので早めに出発する。乗船時間は 20 分弱。黒部ダムまでは標高差 50m くらいしかないが黒部川に流入する大小の沢を越えるのに丸太の橋が数十ある。こまいアップダウンが結構あるのでそう簡単にはいかない (写真上 2 枚)。



途中左岸の奥に立山方面がみえるところがあった (写真中)。

団体を追いついて 9 時前に針ノ木谷渡場に到着。丸太の行く。特にけでもない。人を含んで 4 を合わせる



橋を湖岸まで下って待合の施設がある。単独行の人が女性一人、9 人の団体さんと 10 時までに 20 人くらい集まってきた。船は 10 人乗りくらいの小さな船だった。乗務員が 2 名、折り返して 2 回に分けて運ぶことになった (写真下)。料金無料。丸太橋や登山道の修理も関西電力の子会社が管理運営していると聞いた。なんとなく納得。

ライフジャケットを着けて乗船名簿に記入する。



湖面の風はさわやかだ (写真次頁上)。

対岸 (左岸) の平ノ渡場の施設も似たようなものだった。

マイペースで歩くため皆に先に行ってもらおう。  
ヒュッテから針ノ木谷渡場までの右岸沿いよりは高低差はないが緩やかなアッ



プダウンの道に行く。丸太の橋もある。



黒部湖にそそぐ沢と対岸の山（写真左）。



かんば谷橋（写真左）。

黒部ダムの放水（写真下左）。

「ダム中心」の看板（写真下右）。

15：30、関西電力電気バス黒部湖駅着。携帯で、扇沢駅から七倉山荘までのタクシーを予約する。



16：05 発扇沢駅行きのバスに乗る。バスは5台だった。外国人の観光客もいた。タクシーに

乗り継ぎ、17時前七倉山荘着。料金8,300円。5日間の駐車場で車が樹液でかなり汚れた。

18時、帰宅の途に就く。北陸道経由、自宅着翌日の0：30。北アルプス裏銀座～読売新道縦走山行を無事終える。

令和6年8月 NO129 アンチ・エイジング

山旅遊人

